

門へ 13  
補 1989  
巻 16

南北太平記圖會三編卷之十四下

三編

目錄

官軍棄陣退箱根山

篠塚奮勇開一條血路

義貞全昌躍身越天龍川

栗生名張張波放軍馬

加々見下山殘書退陣營

朝敵為蜂起早馬入洛

正成嘆而乞東國下向

正成摂州發向破赤松

官軍分備防尊氏大兵



目

正成遠智敵苦粮草

野木頼玄獨戰大渡

敗山崎義頭救義助

官軍敗績主上落都

勅使河原決死羅城門

正成防禦摧肺肝

長年駑技敵向内裡

親光狙尊氏忠死洛陽

主上坂本大宮籠願文

南北太平記圖會卷之十四下

三篇

官軍退箱根山

篠塚奮勇開血路

去程箱根路の合戦義貞朝臣戦ふと利を得らまはるる僅か  
 ひるく支へたる足利左馬頭を追落して鎌倉へ入らんぞと掌の  
 内もありと附従ふ輩とち勇よきんが明日を速くと待たる所よ  
 搦手の官軍破きて皆ことごとく逃ちりぬと聞へるに義貞は従ふ諸  
 國の催し勢又路次の軍は降人又出たりつる坂東勢幕を捨旗を  
 倒めて我先もと落行たる間さうの廣き箱根山は透間もろく充  
 満しつる陣よ人ありとも見へむ成またり是多く塩冶高貞のどく  
 君を恨と奉る武士又へ公家の政道をささる者ども北散と尊  
 氏も降参しけるなり執事船田入道ハ一の責口は備を立と居たりけ

ろろ敵陣に喧しく竹の下の合戦へ將軍打勝せぬは早馬ま  
 りくろと云噂を聞くと不審思ひ六只一騎御方の陣を馳廻つて  
 見るに幕斗と曳く人の有陣へ見へむたましく落残りたる陣も  
 皆逃支度の外へたりたりさる竹の下の合戦御方を打負  
 とけり期々の叶ふまゝとく急ぎ大将の陣へ泰て事の子細を申け  
 る義貞打驚く時を問申さるる酒の下刻たる先落残る陣を  
 鎮むべしと諸將を以て是を鎮め申されたり宵の程へ其下知  
 り隨ひるが夜更て後皆ゆけくと落行たる翌日夕の刻に敵此  
 陣中大に勇竹の下の戦ひ將軍勝ぬひたりと呼り旬けは義  
 貞且く思案して何様少陣を引退き落行勢を差留て戦じ  
 とて船田入道を召連を箱根山を引く下を申さる時其勢終る三  
 百騎の過さるる後より馬の嘶聲して馳来る者有り誰なる

らんと顧みゆへ栗生篠塚畑豆理を始め例の十六騎の黨なる義貞  
 此勢を合して退き申さるるよ又北なる山は添て三ツ葉拍の旗の見  
 り敵の御方々と向ひぬ熱田の大宮司百騎引りめて退きたりが尊氏  
 早伊豆の府に在るを聞て此無勢とて打通く人々難叶と  
 義貞を相待るなり又其勢を合して野七里は打出ひたは鷹  
 の羽の旗梶比葉の旗二流さう上菊池松浦の二人五百余騎を義  
 貞の跡を追ふ尋来りたるその行衛の不知前より敵充滿して在  
 り爰は旗を打立と事の様子を見る所なり武重義貞を見  
 死せる人の蘇生しる心地して馬より下り義貞の馬の口は取付禁  
 殿は先達て是迄参りたる事余り無念よ公綱如何と申義貞其  
 行衛を知りて答へ申されり先へ落行らん跡ありたりと  
 申是は先日伊豆の府まで公綱と口論するが公綱若跡は在て義貞

小付も敵中懸入討死せんと思ふ故ありとぞ爰散所寺の法師一  
 人西の方より来りたるが船田が馬の前は畏く是はゆゑとて御通りぬひ  
 候ぞや昨日の暮程は服屋殿竹の下乃合戦は打負ぬひき落申され候  
 ひ後足利の大軍八十万騎伊豆の府は居余て木の下岩の陰人たる  
 と云所は云今此御勢計りよて御通りぬん度努く叶ふまじきと  
 とゆきひとて申たる義貞是を聞くと尊氏に定て義貞を待やと宣へど  
 法師の吞へたる其事の知と泰くせ候ども御用心の躰も見侍り  
 細くの支の知り侍りたるなりと申る此散所寺と申の深草の天皇は  
 御願なるを中頃荒果く魚が如くありしを義貞舟田は仰あつと寺領  
 等の事申沙汰せしむるは依て衆徒の中より斯に註進したる粟生  
 篠塚打双はひひたるが澄踏をうつと延あが御方の勢を打見と哀ま  
 兵ども哉一騎當千の武者と今落残る人々をを申べ敵八十万騎

御方七百餘騎吉程の合手なりいでて懸破と道ひきせん續  
 や人くと勇んと進めぬ畑豆理を始め十六騎の黨足利の数万騎打わ  
 つまらるる中へ會釈もなき懸入と四角八方へけちるをかる処へ鎌倉  
 方の一条次郎時盛先は打たる船田が勢をやり過し三千余騎を馳来  
 新田左兵衛と見るより能敵なりと馳双を組んとしとを篠塚伊  
 賀守中へ隔して一条次郎が打む太刀を弓手の袖は受留右の武  
 者をかひ咽んぐ弓杖二丈身りぞ投りたる一条も大力の早業に  
 りまは抛りたるが倒れど漂ふ足を踏直して猶大将は走り懸  
 んとしるるを篠塚馬より飛と下り兩膝合せて顛は蹴及し倒るると  
 均しく起しも立む取と押へ首かき切て指上り一条が郎等ども目  
 の前より王を討せて何れの悚ふべき篠塚を討んと銘馬より飛下て打  
 と懸る篠塚かひ違ふと蹴倒し踏倒し首を取足をとらぬと

所まで九人、**を**討つる。十六黨も劣るに三千余騎の残兵を駐  
 立、**切崩**を。此一条次郎も大力の早業まで己が勇ま、別よ人たし  
 と思ひ、**老**なり、**手**も、**爰**まで討つる、**是**を見て敵  
 十萬騎有とのども敢て懸合せんとせざり、**義貞**静くと伊豆  
 の府を打と通る、**宇都宮**を始宵より落て、**甚**逆は終居る  
 官軍ども、**此**彼より馳付る程、**義貞**の勢二千騎、**成**なり、**此**  
 勢まで、**後**ひ百重千重、**取籠**なり、**懸**破と通る、**勇**と  
 勇と、**悦**ん、**行**河は木瀬川、**旗**一流を打立、**勢**の程二千騎、**見**へり。  
**近**くと打より、**旗**の後を見ま、**二ツ**巴を旗も、**登**存も書より、**小**  
 山の判官まで、**有**らん一騎も、**余**さ、**討**と、**山**名里見の人、**馬**の鼻を  
**双**と喚く懸、**程**は小山が勢、**四**角八方より散されて、**百**騎より討  
**ま**なり、**か**くと浮鳴が原を打過、**松**原の蔭は、**三**流を差、**勢**の程

五百騎、**か**りり扣、**是**の敵、**御**方々と在家の者、**向**ひ、**是**の昨日の  
 竹の下より、**一**宮を追奉、**所**々、**合**戦、**甲**斐の原氏まで、**こ**  
**た**る、**切**の敵、**取**籠、**討**んと、**二**千余騎の勢を、**二**手、**分**て、**北**南より  
**押**よせて、**見**れ、**下**山二郎、**如**く、**美**太郎の二人あり、**下**山へ、**新**田母方の  
**猶**子なり、**如**く、**美**の、**新**田の妹婿、**依**之、**新**田は、**志**深、**時**行、**滅**  
**亡**の時より、**心**なり、**尊**氏は、**附**隨ひ、**昨**日、**中**書王を追奉、**浮**鳴が原、**陣**  
**取**り、**夜**を明、**二**人、**寄**合、**噂**し、**新**田へ、**如**何、**な**り、**い**はん  
**不**思議も、**無**恙、**御**在、**よ**し、**終**夜、**口**ど、**未**明、**早**走、**以**  
**音**信を、**聞**せ、**未**の、**刻**使、**帰**り、**来**、**新**田、**駿**河、**木**瀬川、**小**山判官、**殿**  
**を**追散、**是**、**御**出、**申**、**二**人、**も**、**夢**の、**初**と、**覚**、**如**く、**甲**  
**を**脱馬、**下**て、**義**貞の馬、**す**、**畏**る、**義**貞も、**馬**より、**二**人の手  
**を**とり、**如**何、**往**事を、**思**、**夢**の、**心**地、**ぞ**と、**申**、**是**より、**下**



浮橋を  
 架く  
 義貞  
 天龍川  
 越る  
 圖

太平記三篇卷十四下

三

山かく美を先よ打せとてさきさきなる中黒の旗を見付と落隠居る  
 官軍共まゝ彼方此より馳集り七千餘騎となりたり今ハ斯と勇  
 くて今井見付を過る所まゝと旗五流さうあけて小山の上は敵二千騎  
 斗と扣へり降人又出らるる甲斐の源氏まゝの敵ハ誰そと向ふハ是  
 へ武田小笠原の者どもおていなりと答ふ扱ハ責よとて四方より責よけ  
 ると高山薩摩守義遠の敵と不餘討んとせ御方も若干亡び一  
 方を開いて責るに利ハいと申を兵由良船田實もと東一方を  
 三方より責上りたり武田小笠原遠矢少く射捨と這く東を  
 てを逃行をる

義貞全昌躍身越天龍川

栗生名張漲浪救軍馬

武田小笠原を追落と後ハ敢と渡敵もたたりたり手負を助けさ  
 る勢を待はまて十二月十四日の暮程ハ天龍川の東乃宿は着申さん  
 きつよ時節川上ハ雨降て川水岸を浸せり長途ハ疲とる人馬なれ渡  
 せとて叶ふまじとて俄ハ在家をこぢちと浮橋をぞ渡されたり。あの時と  
 足利の大勢後より追りけり官軍疲とる上たれば甚難義たるべきを  
 足利の諸大將長僉議ハ三四日延引せり川の浮橋ハ已ハ調ひて数千  
 の軍勢残る所なく一日がらちハ渡して緒卒皆渡果て後大將義貞  
 朝臣と船田入道全昌と二人橋を渡り申されを如何なる野心の  
 者うまらけん浮橋を二間張り綱を切てぞ捨りたり。舍人馬を引く  
 渡りたり馬と共ハ倒に落入て浮ぬ沈む流をるを船田入道誰うあ  
 の御馬引上よと呼りたり。後ハわりたり栗生左衛門鎧着たり川  
 の中に飛込二町計り遊きて馬と舍人とを左右の手ハ差上り肩を越  
 たり水の底を静ハ歩いて西の岸へぞ着りたり。此馬落入りたり時橋又二  
 間より落て渡るべき様も無りきを船田入道ハ飛越りんとて大將



と二人手ふるを取組ゆりと向へ飛渡る。其跡よりひらる兵ども二十余人  
 とひ兼く且く徘徊るを伊賀國住人名張八郎とて名譽の大力有き  
 るがいで渡してとせんとして。遣武者の上巻を取中へ授け投越ける。  
 今二人残りありるを左右の服は狭くて軽くと一丈あまり落る橋をゆ  
 らりと飛く向の橋桁を踏らるる踏所少くも動を成し軽けよ見へるを。  
 諸軍勢遙は是を見とあはゆる。何れも凡夫のつごよ非らむ大將と云  
 手の者どもと云何れも勝も。武將勇士あれども時の運は引とて此軍小  
 打負のひゆるうそ口惜きと云ぬ人々ぞあがりる。其後浮橋を切て突  
 流しりて敵縦追來るとも左右なく渡さばき様へあがりるに引立た  
 る勢の習ひなき大將は從ひ今二軍せんと思ふ者なりける也。矢矯  
 は逗留ありる昨日まで落集る二萬餘騎有つる勢十方へ落失て十  
 分がも無りる。早且は宇都宮公綱大將の前へ來て申される。今夜

官軍ども夜ももろろ落失るる事乘りひが實に陣はあがり成ていづくも人  
 ありとも見へる。爰まで若數日をめぐらば後敵出來て路を塞ぐ事  
 有べしと覺い哀も今少し引退くあは洲侯を前へ當て京近き國は  
 御陣を召まひうと申される。諸大將實に皇居のこと覺束なくいへ  
 さのと都遠き所の長居はあがりるも存じひむとぞ同らる義貞さへ  
 兎も角と面々の異見は順ひひとて。其日遠州を立く尾張の國までひり  
 せらる。然るも下山加美其夜ひそく義貞は申らる。此度東國の者とも  
 皆尊氏は隨ひ事唯朝家の御政の邪をも目覺く思ふ故なり。殿  
 若朝敵とかりぬる。今の世の頼朝卿まで御在をいんと殿は親き  
 と疎きも。左あせと思ひに夫は引くと思ひの外尊氏朝敵と成てけ  
 る。皆頭をうたなむ。尊氏は隨ひるなり。さきハ今の朝の御政  
 人望は背きぬると思召ひる。遠く聞く周武の殿を討つる天下を

利せん為よていひむとや。今も上野へ御より有て御旗を奉らむら公家  
 と殿と尊氏の二つに分まん。尊氏豈一日も東國は足をたむるを  
 哉。とやく思召立ぬひと公家と尊氏の無道を誅し天下万民を利  
 むとを諫めり。義貞打點て申されり。仰めつと。いれ我も先は  
 へ存じとも能く事を謀ひ。此身は於て今朝家をうし奉事なり。然  
 るを今朝敵とならん。人豈義を知る者とせんや。努く有べしと申  
 されり。下山加く美猶又兩度まで申されり。然く返事もなかり。下  
 山加く美又堀口貞満船田長門へ此事を談じ。其上今尊氏は附送中よ  
 て心を通じ。大小名よ此赴申をり。二十八人連判の返事あり。其状は曰  
 仰畏て乗りひぬ。抑今我等尊氏を下知は随ふ。本意とく不存は  
 將の器と言文才と云人の和と云義貞朝臣は競ふ。雲泥萬里  
 の隔あり。然も今公家の政道邪なるゆは天下の武士皆憤

里を合と幸ゆ尊氏朝敵とちり。故は一往その下知み従ふ  
 所あり。尊氏我等は賞を行ひ東國をよく治る程なり。新田殿如  
 何宣ふとも御方は参る者有らむ。義貞若公家は無道を誅  
 して天下の武士を助けぬ。此連衆は不限誰。新田殿は對し不  
 忠を存る者あり。早公家合解の思ひを翻し。我々我等幕下  
 は属し義を重くし命を輕くして中戦をいさ。疑ひ有らむ。此  
 此由宜敷申させぬ。若御疑も可有とぞん。別一紙の誓状を差  
 添ひ。義貞御同意は於て則御陣へ可走。冬は者なり。仍而返書如  
 件誠恐誠惶頓首

と書いて件の誓状起請文血判をよとく。其入は先ッ一番は武田太  
 郎。武田甲斐守。土屋六郎。桃井播磨守。川村河内守。川越三河守。三浦  
 因幡守。佐竹民部。石堂刑部。小山判官。土岐守。佐美。小笠原。松田。

狩野。其外武藏の七黨十三人なり下山加美堀口船田を始として由良長濱等是を義貞に見せ参らせり。義貞はれを見く申さる。實は由く敷御さる。ひうそい古より親しくし方々の今度心替として尊氏は順ひ申されし事。朝家の御政は悪きを疎とわび。夏まで義貞が行跡の悪きまらる。去旁も能く事。心を思ひ。君雖不為君臣以く臣たるべし。古の聖人の申さる。義貞も君を恨む奉る心あつ。已は旁のをもむる。依て隠謀をも企て。やと思ひ。なしてひひ。今尊氏が隠謀露頭して。忝くも義貞は節度を賜ひ。身の二戦は利を失。世の人口も心憂き事あり。又朝敵とならん。こと天下の人。豈義を知耻と。しる。とのそんや。榮えて諸人。指を。く。ん。り。の。駭。と。義の軍門は曝し。名を子孫の後栄。残んと存る。なり。と申さる。船田堀口。由良長濱。は。理。は。服。して。泪。を。流。し。つ。愚。意。を。述。る。お。不。及。と。て。此。由。を。

如く美下山の兩人は申け。六兩人申様。仰誠。義。當。覚。去。今。の。分。よ。へ。御。運。を。開。い。し。も。今。の。公。家。の。政。道。ま。て。我。等。の。如。き。もの。切。り。も。諸。国。の。大。小。名。子。孫。の。為。も。頼。り。も。事。あ。ら。ば。一。人。も。附。後。を。の。有。ゆ。り。存。り。残。念。申。身。の。も。魚。く。り。して。泪。を。流。し。て。退。き。り。り。

朝敵蜂起早馬走洛

か。見。下。山。残。書。退。陣。管。斯。て。下。山。加。美。の。兩。人。の。如。何。は。疎。る。と。も。義。貞。承。引。せ。り。ま。ま。し。き。を。見。て。そ。の。夜。幕。を。引。と。く。落。行。り。陣。所。は。一。通。の。書。を。残。し。軍。の。意。を。細。く。と。書。頭。し。て。を。り。義。貞。長。を。見。て。何。と。か。被。思。ん。泪。を。う。め。申。さ。れ。り。扱。り。此。時。中。書。王。官。彈。正。尹。宮。其。外。官。は。淀。ふ。鞏。京。都。は。逃。歸。て。敗。軍。の。よ。う。と。奏。上。り。ひ。は。禁。闕。の。驚。き。大。方。あ。ら。る。所。は。十。二。月。十。一。日。讃。岐。より。高。松。三。郎。頼。重。早。馬。を。立。て。注。進。申。り。る。足。利。の。一。族。細。川。卿。律。師。定。禪。去。月。二。十。六。日。當。國。警。田。の。庄。に。

於て旗を揚る所は詭間香西是と與して則三百余騎及ぶ。こゝよりつゝ  
 頼重時刻を廻らば退治せん為は先矢鳴の麓に打寄て國中の勢を催し  
 所は定禪不意に夜討をいせしよつて頼重身命を捨て防ぎ戦ふ。い  
 る属する処の國勢忽ち翻て刺し御方を射る間頼重が老父并に一族十四人郎  
 等三十餘人其場は放り討死仕り畢ぬ一陣遂は彼が為は破りて後藤  
 橋兩家坂西ののども残る所を定禪は属する間其勢已に三千余騎に  
 及ぶ近目宇多津に放り兵船を懸し備前の児嶋に上て已に帝都は責上  
 らんと仕り御用心あるべしと告りつる。こゝより京都は新田義頭を  
 始とて結城名和捕以下宗徒の大名大勢を警固とて六四國の朝  
 敵なとの数を盡して責上るとも何程の事うらまきとて左の仰天のな  
 かりを同十一月備前の國の住人児嶋備後三郎高德が并より早馬を  
 立て本月二十六日當國の住人佐々木三郎左衛門尉信胤田中新左衛

門尉信高等細川卿律師定禪が語らひを得て備中の國は打越へ福山の  
 城は揃籠る間彼國の目代浄智入道先手勢身をとりて合戦をのこ  
 すとといふ國中の勢催役もさかるとも無勢あるよつて引退り刺朝  
 敵勝に乗てせめつる故に目代が勢數百人討死し畢ぬ其翌日は小坂  
 河村庄真壁陶山成合那須市川以下こゝに朝敵は馳加つる間程な  
 くその勢三千余騎はよより爰は備前の地頭御家人等吉備律の宮  
 は馳集て朝敵を相待所は浅山備後守備前の國は守護職を賜ふて下  
 向する間其勢と合く同く二十八日福山は押し責戦ひ高德は族一手  
 を責やどつて已に城中は打入刻に野心の國人等忽ち翻り御方を射  
 る間目代浄智が子息七条弁房小周防の一貳房藤井六郎佐井七郎  
 以下三十餘人搦手は放り討死し畢ぬ因之官軍遂は戦ひ負て備前國は  
 引退きは太田判官全職高津入道浄源當國は下着して已に御方は加

つる間又ニツ石より國中へ引返し和氣の宿に於て合戦をいそと所思ひも  
より松田十郎敵は属する間官軍數十人討きて熊山の城に引籠る其  
夜當國の住人内藤弥二郎御方の陣に在り。潜り敵と城中に引入責  
却と間諸卒悉く行方と不知失落しひひ畢ぬ高德及び一族等此時絶  
し死を免む者身と山林に隠し討手の下向と相待ひ若早そくは御  
勢を被下む西国の乱御大事はむとぞ注進を兩日の早馬天聽を  
驚かすむと如何となきと周章ありける所は又翌日の午のころは丹波の  
国より碓井丹波守盛景早馬と立て申上り去る十二月十九日の夜當國  
の住人久下弥三郎時重と彼く伯部治郎左衛門尉中伏三郎入道等を  
相語りて守護の館へ押寄る間防ぎ戦といども戦ひ不慮に起るより  
て御方戦ひ破きて遂に摂州へ引退く然るといども猶他の力を合てその  
耻を雪がんとあふ使者と赤松入道より通て合力を受る所は同心野

心をさうとさむ返答よ及もど刺將軍の御教書と号し國中の勢を  
相催とよ風剛在入口加之但馬丹後丹波の朝敵等備前備中の勢  
と待同時は山陰山陽の兩道より責上るべきよし承と及び御用心あり  
しとぞ告りける又其日の酉の刻は能登国石動山の衆徒の中より  
使者を立て申上り去月二十七日越中の守護普門の藏人利清并井  
上野尻長沢彼多野のいども將軍の御教書とありて兩國の勢を  
つら叛逆とくつる間国司中院定清就要害當山は楯籠るる處  
よ。今月十二日彼逆徒等以雲霞勢押しつる間衆徒等義卒と與し  
身命を輕んむるといども全き事を得て遂に定清戰場はむと  
命と落しれ寺院悉く兵火の為は回録せしめ畢ぬ是より逆徒のあく  
猛威を振ひ近日既は京都よせめ登らんと仕ひそき御勢を可被下  
ぞ申上り。是のころ守加賀の国は富樫越前の国は尾張守高経は

家人伊豫<sup>いよ</sup>阿野<sup>あの</sup>對馬<sup>たいま</sup>入道<sup>にゅうだう</sup>長門<sup>ながと</sup>厚來<sup>あつらい</sup>の一族<sup>いちぞく</sup>安藝<sup>あき</sup>熊谷<sup>くまがや</sup>周防<sup>すおう</sup>大内<sup>おおいち</sup>  
 久<sup>ひさ</sup>之<sup>の</sup>族<sup>ぞく</sup>備後<sup>びんご</sup>江田<sup>えだ</sup>弘澤<sup>ひろさく</sup>宮三<sup>みやさん</sup>善出<sup>ぜんしゅつ</sup>雲<sup>うん</sup>富田<sup>とみだ</sup>伯耆<sup>はくけ</sup>者<sup>もの</sup>彼多<sup>かた</sup>野<sup>の</sup>因幡<sup>いんぱん</sup>小矢<sup>こや</sup>  
 部<sup>べ</sup>小幡<sup>こはた</sup>此外<sup>こゝより</sup>五畿<sup>ごき</sup>七道<sup>しちだう</sup>四海<sup>よっかい</sup>九州<sup>きゅうしゅう</sup>残<sup>のこ</sup>る処<sup>ところ</sup>蜂起<sup>あちま</sup>と聞<sup>き</sup>ア<sup>ッ</sup>王上<sup>おうじやう</sup>を  
 始<sup>はじめ</sup>め<sup>て</sup>はつ<sup>て</sup>公家<sup>くげ</sup>被官<sup>ひごん</sup>の人<sup>ひと</sup>獨<sup>ひとり</sup>り<sup>と</sup>て肝<sup>かん</sup>を消<sup>け</sup>さ<sup>び</sup>ど<sup>と</sup>り<sup>の</sup>責<sup>せき</sup>を  
 其<sup>その</sup>比<sup>ひ</sup>如何<sup>いか</sup>成<sup>なり</sup>嗚呼<sup>あゝ</sup>の者<sup>もの</sup>う<sup>ら</sup>たり<sup>と</sup>らん内裏<sup>うちら</sup>の陽明<sup>やうめい</sup>門<sup>もん</sup>の扉<sup>ひら</sup>は<sup>は</sup>首<sup>くび</sup>の狂<sup>くる</sup>哥<sup>か</sup>と  
 ぞ書<sup>か</sup>け<sup>り</sup>たり<sup>と</sup>ぞ

賢王<sup>けんわう</sup>此<sup>こゝ</sup>に<sup>に</sup>給<sup>たま</sup>へ<sup>る</sup>様<sup>さま</sup>を<sup>と</sup>と<sup>と</sup>め<sup>て</sup>を<sup>も</sup>の<sup>か</sup>り

四夷<sup>しいうい</sup>八蠻<sup>はつばん</sup>起<sup>おこ</sup>り<sup>合</sup>て急<sup>いそ</sup>を告<sup>つ</sup>ぐる事<sup>こと</sup>隙<sup>ひま</sup>な<sup>ら</sup>け<sup>ば</sup>匹他<sup>ひつた</sup>九郎<sup>くわにらう</sup>を勅使<sup>ちやくし</sup>して  
 新田<sup>しんた</sup>義貞<sup>ぎじん</sup>猶<sup>なほ</sup>道<sup>みち</sup>中<sup>ちゆう</sup>て敵<sup>てき</sup>を支<sup>さ</sup>へんと<sup>し</sup>て尾張<sup>おわり</sup>国<sup>くに</sup>は居<sup>い</sup>ら<sup>ま</sup>さ<sup>つ</sup>つと<sup>急</sup>ぎ  
 上洛<sup>じやうらく</sup>と<sup>し</sup>て召<sup>め</sup>さ<sup>け</sup>ける匹他<sup>ひつた</sup>九郎<sup>くわにらう</sup>ハ龍馬<sup>りゆうま</sup>を賜<sup>たま</sup>へ<sup>て</sup>早馬<sup>はやま</sup>は打<sup>う</sup>ち<sup>を</sup>る<sup>が</sup>こ<sup>の</sup>  
 馬<sup>ま</sup>よ<sup>の</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>の道<sup>みち</sup>と<sup>し</sup>て一日<sup>いちにち</sup>の道<sup>みち</sup>と<sup>し</sup>て相<sup>あ</sup>い<sup>ひ</sup>あ<sup>は</sup>り<sup>し</sup>て思<sup>おも</sup>ひ<sup>ま</sup>さ<sup>つ</sup>つ<sup>と</sup>合<sup>あ</sup>は<sup>れ</sup>る<sup>が</sup>実<sup>じつ</sup>も  
 十二月十九日<sup>じふにがつにじゅうくにち</sup>の辰<sup>たつみ</sup>刻<sup>とき</sup>に京<sup>きやう</sup>を<sup>た</sup>て<sup>て</sup>其<sup>その</sup>日<sup>ひ</sup>の午<sup>うま</sup>の刻<sup>とき</sup>に近江<sup>おんみ</sup>の愛智<sup>あいぢ</sup>川<sup>がは</sup>の宿<sup>しゆく</sup>小

ぞ着<sup>つ</sup>き<sup>け</sup>り<sup>ける</sup>小<sup>こ</sup>彼<sup>あ</sup>龍馬<sup>りゆうま</sup>俄<sup>たち</sup>に病<sup>やま</sup>出<sup>で</sup>て<sup>死</sup>に<sup>し</sup>ま<sup>さ</sup>つ<sup>と</sup>そ<sup>を</sup>不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>な<sup>れ</sup>  
 匹他<sup>ひつた</sup>ハ乗<sup>のり</sup>替<sup>か</sup>よ<sup>の</sup>う<sup>ら</sup>日<sup>ひ</sup>を<sup>経</sup>て尾張<sup>おわり</sup>の國<sup>くに</sup>は下<sup>げ</sup>着<sup>ちやく</sup>し<sup>此</sup>子<sup>こ</sup>細<sup>こ</sup>を新田<sup>しんた</sup>左<sup>さ</sup>兵衛<sup>べゑ</sup>督<sup>とく</sup>  
 小<sup>こ</sup>申<sup>ま</sup>け<sup>ば</sup>義貞<sup>ぎじん</sup>先<sup>ま</sup>京都<sup>きやうと</sup>へ引<sup>ひ</sup>返<sup>かへ</sup>し<sup>て</sup>宇治<sup>うぢ</sup>勢<sup>せい</sup>多<sup>た</sup>を<sup>支</sup>へ<sup>る</sup>が<sup>合</sup>戦<sup>くわせん</sup>を<sup>致</sup>  
 さ<sup>め</sup>と<sup>し</sup>て勅使<sup>ちやくし</sup>は打<sup>う</sup>ち<sup>を</sup>連<sup>れ</sup>て<sup>ぞ</sup>上<sup>の</sup>れ<sup>り</sup>此<sup>こ</sup>馬<sup>ま</sup>ハ天<sup>てん</sup>下<sup>か</sup>一<sup>いつ</sup>統<sup>とう</sup>の初<sup>はつ</sup>佐<sup>さ</sup>木<sup>き</sup>塩<sup>しん</sup>治<sup>ぢ</sup>判<sup>はん</sup>官<sup>くわん</sup>  
 高<sup>たか</sup>貞<sup>じん</sup>が許<sup>もと</sup>より進<sup>しん</sup>献<sup>けん</sup>せ<sup>し</sup>馬<sup>ま</sup>ハ太<sup>たい</sup>平<sup>へい</sup>の嘉<sup>か</sup>祥<sup>しやう</sup>なり<sup>と</sup>て御<sup>ご</sup>賞<sup>しょう</sup>を<sup>ま</sup>ん<sup>ま</sup>し<sup>り</sup>藤<sup>ふじ</sup>  
 房<sup>ふさ</sup>卿<sup>けい</sup>ハ御<sup>ご</sup>尋<sup>じん</sup>あり<sup>ける</sup>時<sup>とき</sup>藤<sup>ふじ</sup>房<sup>ふさ</sup>卿<sup>けい</sup>宣<sup>のたま</sup>ひ<sup>ら</sup>らん天<sup>てん</sup>馬<sup>ま</sup>の用<sup>もち</sup>る所<sup>ところ</sup>ハ唯<sup>ただ</sup>大<sup>だい</sup>逆<sup>ぎやく</sup>不<sup>ふ</sup>慮<sup>りょ</sup>  
 又<sup>また</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>る日<sup>ひ</sup>急<sup>いそ</sup>を遠<sup>とほ</sup>國<sup>くに</sup>は告<sup>つ</sup>ぐる時<sup>とき</sup>用<sup>もち</sup>る小<sup>こ</sup>聊<sup>りやう</sup>得<sup>とく</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>は</sup>是<sup>こゝ</sup>静<sup>せい</sup>謐<sup>めい</sup>の朝<sup>あさ</sup>は出<sup>い</sup>  
 て兼<sup>か</sup>て大<sup>だい</sup>乱<sup>らん</sup>の備<sup>そな</sup>を<sup>せ</sup>く<sup>豈</sup>不<sup>あ</sup>吉<sup>ふ</sup>言<sup>げん</sup>表<sup>へい</sup>事<sup>こと</sup>を<sup>待</sup>て<sup>ま</sup>よ<sup>と</sup>練<sup>れん</sup>め<sup>の</sup>ひ<sup>し</sup>ぬ  
 龍<sup>りゆう</sup>顔<sup>がん</sup>少<sup>せう</sup>逆<sup>ぎやく</sup>鱗<sup>りん</sup>の御<sup>ご</sup>氣<sup>き</sup>色<sup>しき</sup>あり諸<sup>しよ</sup>臣<sup>しん</sup>皆<sup>みな</sup>色<sup>しき</sup>を<sup>変</sup>じ<sup>申</sup>さ<sup>れ</sup>ら<sup>る</sup>が<sup>今</sup>此<sup>いま</sup>時<sup>とき</sup>小<sup>こ</sup>至<sup>し</sup>  
 て主<sup>しゆ</sup>上<sup>じやう</sup>を<sup>始</sup>め<sup>奉</sup>り<sup>諸</sup>卿<sup>しよけい</sup>皆<sup>みな</sup>藤<sup>ふじ</sup>房<sup>ふさ</sup>卿<sup>けい</sup>の諫<sup>けんげん</sup>言<sup>げん</sup>明<sup>めい</sup>智<sup>ち</sup>の金<sup>きん</sup>言<sup>げん</sup>を<sup>思</sup>ひ<sup>出</sup>さ<sup>れ</sup>  
 る<sup>最</sup>耻<sup>ち</sup>力<sup>りき</sup>を<sup>さ</sup>ら<sup>べ</sup>り

傳<sup>でん</sup>ふ<sup>日</sup>十二月<sup>じふにがつ</sup>十一<sup>じゅういち</sup>日<sup>にち</sup>讚<sup>さん</sup>岐<sup>ぎ</sup>より高<sup>たか</sup>松<sup>まつ</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>頼<sup>たの</sup>重<sup>じゆう</sup>早<sup>はや</sup>馬<sup>ま</sup>を<sup>た</sup>て<sup>て</sup>急<sup>いそ</sup>を<sup>告</sup>し

久翌日諸卿評議りつて。近日は楠判官節度を下されて罷下るべき  
 由宣旨を被下りる正成勅使は對して被申りる。敵慮の赴謹で承り  
 ぬ四国の朝敵は恐るぬ不足所。中國北国九州の中にも朝敵は与らぬ  
 る者多く侍らんと。れば某四国は渡りて道をふまがむ。たゞ京都は如何  
 なる者多し侍らんと。ても魚左右馳上る事難義なるべし。暫く中国の變  
 を御覽せしめて。四国の節度を被下り可然りや。いんと勅答申上ら  
 ざる。勅使の云中国北国小朝敵は与らざる者。被聞出てぞ被申な  
 らん。覺束かくと宣ひけむ。正成夫は於今と何と承る事も侍らむ。去  
 ち。近年朝の御政をさるる者。諸国は多くの上。足利兄弟内  
 は野心を合ひ。侍て准后を誑し奉り。敵慮をつつひ朝威を假て  
 諸國の兵を親あし。少くも朝家を恨み奉る。國人を招き。集めて是  
 を扶助と。されば尊氏數の國を給り。餘多の所領を拜領し。なぐら

時行追討の宣旨を賜て。東国は下りしとき。手勢千騎も不足  
 へ皆所領の納米を。君と奉恨國人は引出物よせ。故は。郎淀は少し  
 其上赤松入道も播磨の守護職を魚所。滑石上と。是も。故は。朝  
 恩を忝し。存ぞほしく。是も尊氏准后の兵部卿親王と。御中の  
 不和なる。依て其下風。立し。赤松も。あなぐらふ御あくと。お  
 深かりし事を幸う。なると喜びて。万支は。諛を構へ。准后へ申あぐら。又  
 赤松一家の者共を親し。仕り扶助せ。所は。大塔宮御智惠の賢く  
 渡りせ。故殿の法印良忠。此支を見知て。官へ時。辨へ申け。む。む  
 尊氏威勢の微くなる時を討んと。む。ひ。朝の御為。み。あ。む。む。む  
 尊氏亦准后を頼と。奉り。諛を構へ。終に。官を奉。失の。と。ふ。あ。む。む。む。殿  
 の法印を。と。へ。被。誅。む。き。赤松と。如。と。て。雲州富士名判官朝山太  
 郎安藝。熊谷小早川周防。小戸板大内。備中。小三村庄成合。備前

中吉備後宮。杉原此等の朝の御政を快く思はる者ども今見  
 れ中国より早馬の参らんどもを北國の良も覺東なく其上足利  
 殿諸國へ御教書を被遣しと云風聞ありらまは実由くしき御大  
 夏ぞか其上是程の御大事ふ中國九州の者ども馳参る者少き  
 朝家を奉根所ふあり其分國も足利よ与らる者少くはしを  
 伊丹十郎兵衛と始とて討侍りけまは結句准后より御とがめのお  
 けまども謹で愚意を申上げては何と申ひかれつらん於今君も  
 某の事をばうしろめなき様も思召の由風聞も侍まども力及  
 びと存とて數日を過し此等の勅答よて不侍只去りて四國の追  
 罰を御延引有て事の躰を御覽せし色と存る此一ヶ条勅答な  
 らしと申けまは宣旨の御使も実もと被思無與氣よ成て歸られる正  
 成が申所てみ奏聞被申たりらまは君も少し逆鱗の色在る楠左や

う小事多ふ申条今み不始と被仰たりさしての長年とや可被遣と  
 あり所中御門中納言申されらる義貞已も東國の戦ふ利あり  
 ぶとて遠州へ引入る由早馬到来の故四國の朝敵蜂起の上正成申旨  
 其所謂無事もあはと暫く諸國の愛をも御覽せらるらん京  
 都余りも無勢なれ如何と被申たりけまは君も実もと思召の所よ  
 く日十一日小高徳が注進本文の如中国も朝敵起まるとより君も臣と  
 楠が申所掌と指が如しと色を度とて又諸國も如何なる事と申来  
 らんどもんとし斥唾を吞て御在けまは楠召とて召されらる正成泰内と  
 勅問云天下の事汝が申はる所掌と指が如し何とて申らるぞ旨赴  
 と不殘申せとあり楠泪を流して申らる御政の悪き事ども餘多は  
 み依てこそ世いかく乱まては軍勢に忠賞を行きて相違の事准  
 后の御口入の悪き事ども三十ヶ条み余りて申上今御覽は赤松り





正成まさなる 旗はた 破やぶ 進しん 松まつ 破やぶ 破やぶ 破やぶ  
 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ 破やぶ

朝敵よ成さんと存る万里小路藤房卿の申されしも是よてそは人  
 を知りゆふそを國を治るよ第一入夏よ一度非義なる者重て非義な  
 りんや尊氏へ故相州が重恩を矢よれり小貳大友が手のうを返  
 せし事如斯の者ども豈御大事よ逢て命を捨んや然るを准后の義  
 みよ色と令して誰し申と眞実と思召て御口入ありりよ君是を御  
 承引有て大塔宮の御夏などを始泰らせ御政み御あやまりの有し  
 故ゆそ世のかく乱よてゆく継母の不和の事ハ和漢とも小例多き  
 夏ぞし又奉行頭人よ珍物を賜て親よせん夏と思ふ何の用ぞ皆  
 佞人のとろ所をるべし然るを別當職の事ハ其外の公卿等皆彼を親  
 しく思ひのよ依て彼が云事を自よ善と思ひのよよを自然よ御ひ  
 が夏ハ有し准后を始泰らせ上一人より諸卿皆尊氏兄弟が謀よた  
 ちさせゆひてそを國のかく乱よてゆくと被申けよ諸卿も閉口いと

耻うしく被思君も實は御後悔の御気色頭よと重て勅向有る  
 此よよ心尚諸國は朝敵となる者多るばやと仰れり正成勅答ま  
 りしりるへ北国九州より亦早馬の泰をらん攝及河州泉州を其隨  
 分政道仕の御敵となる事ハよあるも諸國よ朝敵の名を得る  
 者多く侍らんと申上るよ自今以後弥朝家よ一の軍忠を可盡  
 然る西国下向の夏ハ汝が申所よまらざるよと勅定有て捕をよれ  
 けし其後定平朝臣被諫ゆ丹後中朝敵出来て赤松も敵と  
 成ぬと申す聞有るよば弥楠が申せし所符を合よるが如くと君  
 も臣も思召て今かく天下北乱となる夏准后の不謂口入の故ぞし  
 とて君も御心よりよとたりゆひる實は笑中双を隠し傾城傾  
 國最恐るべき事なり

正成嘆而乞東國下向

正成攝州畿向破赤松

去程は楠正成朝庭は泰して申る西國の朝敵事凡聞侍りぬ是等  
 數を盡して上るともたまたまの事有らざるを其上備前人を遣はて敵  
 の弊を見せ赤松をたごめんと播磨へ人をはらうとつるゆ尊氏上は  
 西國の朝敵より難し正成東國へ罷下て義貞力を合せ謀を以て戦  
 恐は足らん尊氏を退治せば西國北國へ自ら王化は随ひあんと思ひ侍る  
 間某罷下とぞと謂はんと王上も諸卿も正成帝城はなぐんば誰れ皇居  
 を守護し奉るべしとて不被下楠重と申るの義貞尾張を引上り  
 むぐ江州より東へ御方は志の有らん者も皆朝敵と成ゆらん左有べ  
 尊氏即時に帝都へ攻上るる然らば北國西國の朝敵も同時は上るべ  
 去は帝都の乱迹まは在のとは非を日本一同して上りあはるる御方  
 打負はん事疑あり正成罷下て義貞力を合て戦つ十やして二ツ勝  
 はん十死一生の合戦は此時を侍る又西國の朝敵上りたれば越後守の御

勢結城殿十種殿名和殿其外諸國の官軍餘多侍る何条更の侍る  
 なきと申しつる兵諸卿何時より日比の修り色を度とて西國の朝  
 敵の上りたりとも正成角て在むる軍をも為さば楠東國へ下らん条こ  
 ろえ難しと宣て義貞を呼せしれとや實は日來月來修り給ひ人々  
 仰天せしむけるも理なり楠速くして又洞院の相國を以て申入る正成が今  
 國の兵凡一萬八千余騎内一萬余騎まで罷下るる残り八千余騎を弟い  
 正氏は恩地和田等を指す都も苗置侍りたる其上子あて候多門庄五郎  
 年十歳は罷成候を相國へ預け進ぶとて然るに御不審の更侍るは  
 又新田義頭を始とて長年親光忠頭等大勢まで在り自然西國の  
 朝敵數を盡て向ひとも何の御恐ろ有るも其上尊氏都ちりく不來程と  
 西國より攻上る事有はくして侍る又正成尾及は罷下りふ先美濃の  
 國は土岐の一族尊氏は屬して侍る彼等が所領を奪ひ諸軍勢を招人

諸國は身を隠して時の変を待て者ども馳参らむと云々やらん。その  
 外近江尾張伊勢等の國は尊氏は属したる者どもの所領を取て軍勢  
 は當て招んは御方二万餘の侍を是て矢矯の御方と先陣として  
 戦んは尊氏が師立拙侍を追ふ事十日の内は在然く猶奥方の  
 の共は源中納言。顯家卿より親と泰せたるは奥へは上野は残り  
 新田の一族共は引合せて上野をこゝん。其時義貞正成尊氏を追て下らん  
 小なごう勝てり。然るは西國の朝敵とも自然は亡ぶとさめてい。此術も  
 是侍の由敷御大事なるべしと申りま。相国を始め参らせ京中の勢  
 を透して如何有べき新田をよ呼上せ侍らんと思召赴なるは結句  
 楠まで都を去り如何とて皇居を固ん杯被申りま。君も臣も一同して唯今  
 天地も崩るやうふの被仰て終ふ西他九郎をりつ。使とて義貞を呼上  
 せりま。正成今ハ力は不及處なりとて俄に摂津河内和泉の間小城

を構り事十八ヶ所國人三箇國の内は六十五人幼き実子を預り千劔破  
 り置て爰ハ山深ふて如何なる敵も左右なく寄来る夏有回敷なるは  
 少く人の妻子をも千劔破り置和田と正氏は預ける國人の妻女ども千劔  
 破り來りし十七人餘は皆幼子をぞ人質として預けり。角て正成は五  
 千余騎もて都に在り飯盛八幡をも城も取立攝津は尼崎も城を築北なる  
 山辺は七ツの城あり餘は和泉河内の間なり。義貞朝臣は十二月敗軍の士二万  
 余騎を引卒して京着せり。翌日参内あり。諸卿東國の戦様子を  
 を問ひ義貞細くと物結ありて其後坊門清忠を傍へ招て申されたるは  
 は今度東國の兵義貞も背て尊氏も属せし事ハ某が謀天命も背と存  
 成ては左も非。近年公家の御政の邪なるが致と処なり。是見ゆ。義  
 貞朝敵とたつと上野は下りたる。馳來らんと東國の兵の中より連署の  
 状のりとして取出して見せり。又義貞其古へ親かりし者共尊氏が朝敵と

かりつらと聞て皆尊氏に馳服ひぬ去さるる義貞朝家の御為に一命をか  
 ねくせぬ敵を退るる多岐疑は太平の後穴賢此ふころの人の邪の御政道よく  
 忠の實否を正して軍勢を賞を行ひの人の自今以後諸良も付て准后の御  
 口入をこせ止泰せしむる多岐と宣けれは清忠実よその良も以前より正成重  
 奏聞仕り侍り多岐の君に先非を悔ひひく准后(御気色快よろこぶ)去な  
 がる其連状の赴主上へ見せ泰せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐  
 を御気色最不快則内侍を以て此良を准后(被仰ける)今の天下の乱を  
 たる良の偏は准后の不義より。褒姒が傾國の罪は類せしむる多岐と宣せしむる多岐  
 と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐  
 敵は非ど多田左衛門義玄が幼子と人質の為千劍破(入)と云間正成直  
 は泰て事の子細を承(知)と申て大勢を多田も向ひしむる多岐と宣せしむる多岐  
 人家の子老中の子共を皆出(し)る。二十六日小楠都も帰り其日(山

崎ふ著ぬ又翌日北七日赤松を先とて細川定禪須磨へ発向するはしを  
 聞と同日午の刻は追散さんとて又取て返(り)同九八日の酉刻は正成六千余  
 騎もて須磨の陣は向(き)多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐  
 馬の朝敵一萬騎計細川定禪の渡海より以前は摂津國まで発向し元弘  
 の吉例なれば明日の摩耶山を城とて取上らんと所(の)在家は火を放ち  
 生田小屋野は陣を取て在(り)小楠が寄なりと申りれば赤松正成は昨日多  
 田より都へ帰りぬ何よとて今来るべき當國の者も小楠の下知もよつてぞ  
 進(り)追散せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐と宣せしむる多岐  
 勢一萬餘騎を卒(に)打出て其方を見よ菊水の旗あり小楠が向ひしむる多岐  
 疑ひはしと諸陣驚き騒ぎ赤松が先陣別所浦上未(だ)勢も備(は)る所(に)  
 捕(ら)先陣志貴右衛門八尾別當矢一筋射るとそ見(え)は拔連(り)懸(り)たり  
 小赤松が先陣立足もろく崩(れ)てたり正成是(れ)利を得て鼓(を)打て軍(を)六

つよ分るる先陣一手の乱し。後陣の備を堅め静し進ませる程は諸国の  
 集り勢共乱を立て敗走も赤松父子取てかへしけきとも引立たる大勢  
 たるは續て返も者もたぐ。別所六郎左衛門守野能登守上月七郎兵  
 衛等討死も則祐長を見て松原は隠したる八百余騎を頭一手に成り  
 て横よ合て静小打て捕勢二千余騎を懸向ひ戦るる兼て思ひより  
 ぬ事たるが軍乱もて戦ひるるを正成本陣の千余騎備を堅して鼓を打  
 て則祐が勢の中へ是非なく打て通しけき赤松が兵志は戦をぞ見し  
 よ一度は咄と北散て一所は打寄らば正成敵を追ふ事一里よして日已ふ  
 暮けも首四百餘級切懸を夜の内は尼崎の城は打入翌九日の上  
 京を然る処足利殿より御教書とて瀬川よて行逢ぬ使ひ細川阿波守清  
 氏の手の者伊木四郎次郎元伏源六と云のちなる捕是を披見せしむ  
 譽田左兵衛を以て使の口上を問ふ。兩人の云和田殿は恩地殿を以て申入

侍らんとする。和田恩地へわらふ。此日は居らば譽田とて心置るべきも  
 のふわらふ。只一人を退らばよと云へ傍の人を除て云尊氏今度上洛を企  
 る事全く餘の義よりは朝家は忠有て私を然るを新田諺を構へ  
 と尊氏追討を申成条難の中の第一なるあり上りて此旨赴を申関んと欲  
 する小新田大勢よて道をさへ思の外は朝敵の名を得り今四海乱  
 れて尊氏は随ふもの多し朝家の乱豈此は過んか此罪を以見るふ皆  
 逆臣義貞あり。然る且朝の御為又八国の為を正成尊氏と一黨  
 して新田が氏族を誅罰しり。畿内五ヶ國南海の六州近江伊賀伊勢  
 等の國を官領在て朝家を守護しり。尊氏に鎌倉よあつて東國  
 を官領し直義は中國に居し西海を鎮んとする。御教書の趣も然  
 らんとする。清氏内状りり。正成あがひて兩使ふ向て云向後  
 の為よ侍まは御使をも討度侍れども。無下よ誅せん事も流石なれば

早々御入りあまき尊氏兄弟天下を奪ひたるを条某の三年以前  
より存る所なり。日本は唐土天皇を添へてのふとも正成が命は限り  
つまひ義小督人外尊氏の不義の富貴少しも羨しあらず。最きこな  
くはこれとして使者を遣しけまは皆りのもめりくと喜びたり

官軍分備防尊氏大兵

正成遠智敵苦艱草

去程は改年立歸きとも内裏の朝拜もあらず節會も行ひまじき京  
白川よみ家をまぢりて堀に入財宝を積で持運ぶ只何といひ沙汰もな  
く物騒ぐく見えたり。かゝる程小將軍己よ八十万騎あて美濃尾  
張は着のひぬと云程してあまき四国の御敵も近付ぬ山陰道の朝敵も只  
今大江山へ取あがるべんと聞えり。此間召ふ應とてより集りて國  
の軍勢ども十方へ落行り程は洛中へ残り止る勢一万騎逆もら  
どとぞ見えたり。そまも皆勇める気色もなきて何方へ向えと

下知せしるるもども怖恐るる。さきよて更に向とんとせざるを  
軍勢の心を勇ません為に今度の合戦は於て忠あらん者よ不日  
は恩賞を行つべしと云壁書を交断所は押されたり。其時何者の仕りけ  
ん此書付のおくは例の落書をもぞ致しり

かくむらりたるさせり編む此むらり汗とあまきあやと

斯て有るまき夏なるは正月七日は義貞朝臣内裏より退出して軍勢の  
手分あつふ尊氏定て勢多へぞ向ふらん。然るは義貞勢多を以て防ぎあ  
宇治の勅定よりぞ。治承より以来數度の戦ふも宇治より破れ侍を  
大事に思召の間楠殿被向侍を大渡へは忠願長年向もは山崎へは  
屋義助向も侍をさきなり。長年の云朝家も敵を防ん者義貞一人に限る  
間敷新田殿の尊氏も數度追立てて在せぬ無用と侍る。今度勢多へ  
は某こそ向ひ侍りぬと申を。又忠願御の三ヶ國の領主も侍まは何方

へたりとも一方の大將承て向ひのひたる殿中よそのと武功を宣ふ公家  
 の人として一手よたりて戦へ足纏ひとちるものあまふ某只一人勢多へ向  
 かりんと申。義貞この身の計ひよあまふを勅諭して侍るを被仰られを  
 長年勅諭たうぶ直よ召てを被仰下んりのををと謂て用ひ次捕申る  
 へ不與ふは長年の御身一人非を皆勅諭の赴あて。新田殿より仰ひは  
 せと制しければ長年人の支へ知らを某ふ於て今更人の下風よ立  
 間敷めををと申を。捕重て申す大夏の前よ私を立りふこと長年よを  
 似合侍しを。御存りの前よをせしん者と云きれば何とも宣ふ某人の  
 下風よ立間敷をを謂し。義貞氣色を損じて長年を某が下風よを勅  
 めたり某も存寄もなき事ぞよや御勢の如何程う在らん尊氏  
 定て大勢よて向らんをんごんとなり。長年此合戦墓しにかじと存る  
 上百万の敵來り候とも某命の有ん程の勢多を被破り。新田殿此

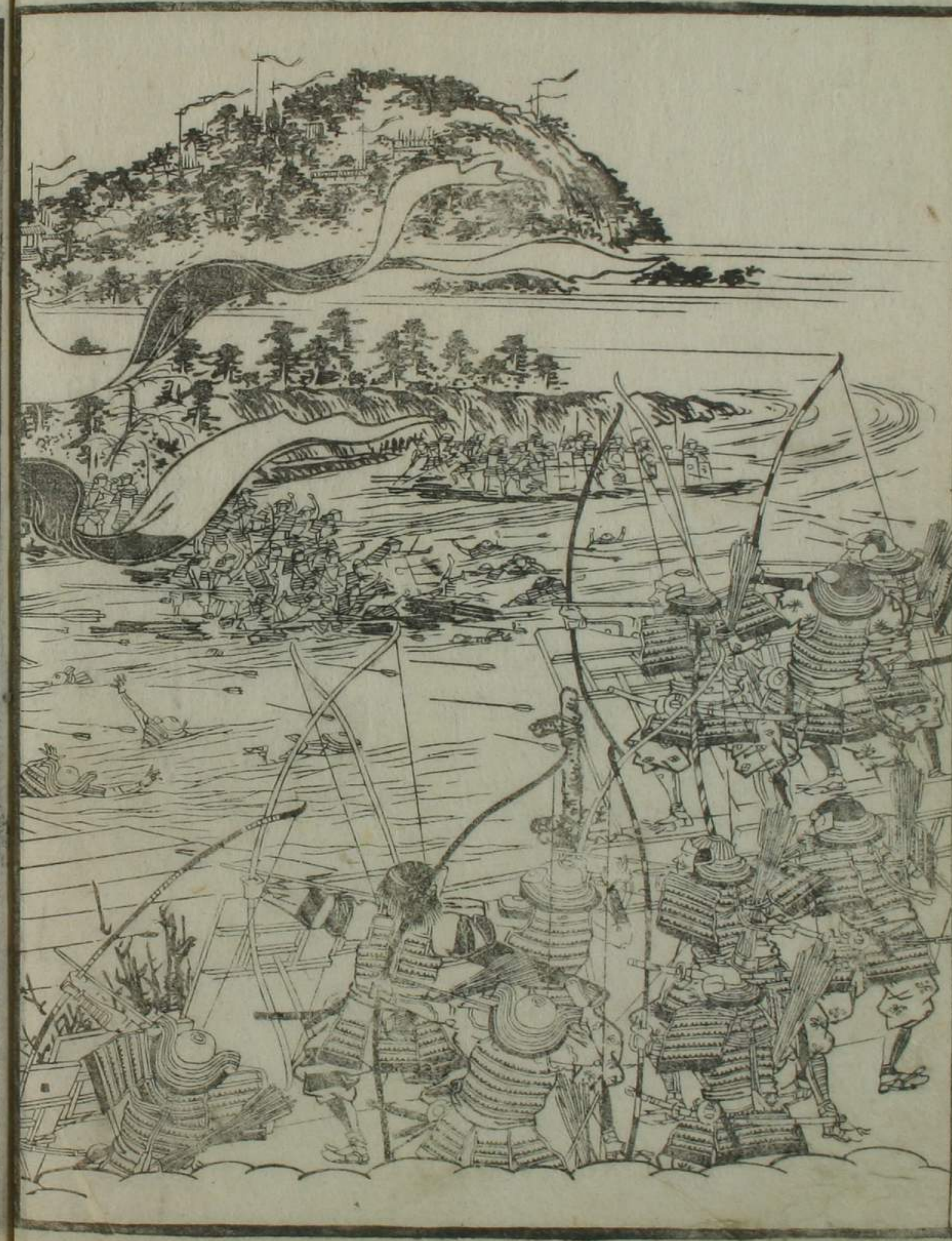
御加勢をを請申は。御心易く思ひの人とぞ申ける。義貞力よを  
 よのほど大渡へぞ被向る。長年の軍勢三千余騎有るも内一千余騎  
 へ國へもぬ然るに此人勇ま勝りしれども下を慈む心たうして。郎従  
 どもも折よぬれての苦き目よをのを見せたる故也。技よ落失く  
 五百騎斗りて残り留りたるを。出雲伯耆因幡三ヶ國の勢をよとて  
 らも二千余騎よ。不過と見へね。捕矢尾別當と志貴右衛門も五百  
 余騎を指副て長年の陣へ遣し。長年人の合力を不を受と千度百  
 度被申る。菊水の旗を除き。貴殿の御紋の旗を某の兵も遣され  
 以杯と細く透る。長年心解て捕殿の加勢を受間敷某も非  
 あり。其勢を卒して勢多よ向ひ供御の瀬。膳所が瀬二ヶ所。大木を  
 数千流しかけて。大綱を張り乱楯を打引懸る。繋ぎとれ。何を何  
 伯水神たうとも上を遊難く下を潜難ぞ見へる。又捕義貞よ私



語て申々る勢多しと大事小侍も大渡へ向ふ敵あつた宇治へ御越あま正  
 成へ勢多へ向もんどろぞと申ける宇治へ捕判官正成も大和河内和泉  
 紀伊の軍勢五百余騎を副て向らる橋板四五間刻迦して川中へ大石を  
 疊上げ逆茂木も繁くあり立ち東の岸を高く屏風の如く切てそ  
 たまへ河水二ツも合せて白浪漲り落る事恰も龍門三級の如くあり  
 敵も心安く陣を取せしと橋の小島旗の嶋平等院の辺を一字ものま  
 らむ焼拂々る程は魔風大厦も吹て忽焼失り了て浅はしむ是  
 正成深く思慮も事なる其故は義経木曾追討の時も焼く然る  
 も敵の為は焼くらく御方悪し敵家の中はして心安く陣を取な  
 んは謀幾等も有べし若し謀を不知ば尤もはらん元弘  
 以来數年尊氏兄弟の手のりども向て正成家を陣も事大よ  
 悪きは常く語るも敵寄来て楠焼むと見へ敵より焼かん御

方へ近所の畑を見て驚く者あり遠き陣の御方へ猶驚く者なり是  
 一ツ敵の民家を毀ちて筏も組陣の具もせんかねばと思ふ是一ツ能家  
 へ崩して御方の用は遣ひて餘は焼くそたり夫のそちもど八里近辺の下  
 民の貯を追捕も郷民是は驚き近郷を捨て遠所へ隠るる是十里の  
 内は糧なき様にして遠國の軍勢を苦まらんと思所あり摂津河内和  
 泉等の國へも地下人等里々米を置置勿と敵は奪らるるなど觸  
 るども縁を求て津浦の城へ皆籠ると去へ摂州海道より十里の内  
 へ民一人もたかくして兵糧は瘦まるる西國の軍勢の多かりしとなく山崎  
 へは照屋右衛門佐を大将として洞院按察大納言文觀僧正大友千代松  
 九宇都宮美濃將監藤藤海老名五郎左衛門尉長九郎左衛門以下七  
 千余騎の勢を向らる宝寺より川端まで堀を塗り堀をちりて高櫓出櫓  
 三百餘ヶ所は搔雙々陣の構何となく勇ましげに見へれども俄は拵

野木頼玄  
大渡の  
橋上よ  
勇戦の  
圖



たる事なれば堀の土も不乾ありも浅し又防ぐべき兵も京家の僧正の  
 御坊の手の者杯と号る者ども多けり此陣の軍へ墓々かじと  
 そ見たりける大渡より新田左兵衛督義貞を惣大将とて里見鳥山  
 山名挑井額田田中籠沢千葉宇都宮菊地結城池風間小國河内の  
 者ども一万余騎よて堅めり是も橋板三間まむり引落して半より東  
 ふ橋指をかき槽をかきて川を渡を敵あへば横矢を射て落し橋指を  
 渡る者らへ走りをめつと推落を様よて構へり馬の懸上りて道茂木  
 びひひと引かけて後よ究竟の兵ども馬を引立とて並居とて如何なる  
 生食磨墨よ乗共爰を渡とて見へり去程は尊氏八十万  
 騎の勢を卒し正月七日近江國伊岐洲の社よ山法師成頼坊が三百余騎  
 よて播籠りける城を攻んとするふ近村小根たりける所を召捕  
 て是と問くふ去る十二月十七日より楠殿當國小発向りのひて所くの

民屋を追捕し下民ども仰て律く浦よ出り國中の舟を縛り  
 數千艘よて三日の内よ坂本へ運取め殊ふ足利殿の御一家の人々の所  
 領とて荒々しく関所なりとて皆奪取て舟よ坂本へ運りて後同北  
 一日よ上京しり同國中よ米へ有間敷ひ又御発向よ恐とて海道筋の  
 者ども北近江の方へ逃行其外へ縁を求て北隠ひと云々るも是も正成  
 が遠謀よて公家の人々捕を東國へ寄せ北ざり極一時敵と糧よ苦  
 まりめんと思ふ是も又御方打負なる君を取奉て山門へ登さんと思ふ  
 處よ在るなり案の如く尊氏兄弟も日比の能友とて思ひよ今ハ  
 情なく軍勢を苦めり哀れや安らぐねと謂とて伊岐洲の城を佐  
 く木道誉土岐頼遠等手勢を以て一日一夜よ攻落しぬ尊氏の勢多へ飛向  
 せんと軍使を勢多へ遣りける馳歸て此よ新田あはれとて帆懸船  
 の紋付より旗菊水の紋付より旗五十流打立て其勢三四千程有

らんと申侍まへ初ハ新田よそへ無うけを。帆懸船も長年より菊水の捕をり  
一向は打まき宇治へ向んぬ捕如何なる謀よしと美濃尾張すべし發  
向とも知まじと。うち破りて通らんよの恐敷捕がよも破らば如何も  
せんと評定あつと仁木桃井土岐武田小笠原荒川等十二万余騎を  
残して當國の府小陣を堅め捕出たが戦へあらず此方より手を出さ  
なれと下知して尊氏兄弟へ近江より伊賀の國へ打越宇治へ向らさけ  
るに八幡山よ城あり菊水の旗と立てる捕が兵たり宇治止成あり其  
勢一万余とあくとあり。新田ハ大渡り小在より聞えなむ後又田と  
八幡の山下陣を堅めて先此城を責んと評定つりなれども捕城ふ  
かゝる別的事有べしと大支を前小置かゝるわ程の小城を責と  
は如何のせんとして徒見上る斗りあてさる業一ツもあつたり宇治へ  
誰をも遣すべきと評定あつたり小捕ふ恐とて我を向んと言とのあ

く唯口を閉てあつたり。太さかづ清手ちてん叶ふはとと佐木  
道誓千葉佐竹の人々足利尾張守を大将とて十八万騎を引合て  
楠が清手あぞ向らる。細川卿律師定禪ハ四國中国の勢を卒しく  
正月七日播磨の大藏谷よ着らる。赤松信濃守範資我國よ下  
て旗を奉ん為よ。京より逃下りらる。行逢互悦ぶと限なり。且元弘  
の嘉例なりと。信濃守を先陣めて其勢都合二万三千余騎正月八日  
の午に刻よ。又川の宿よ陣をとる。二条大納言師基卿ハ丹波の國司た  
りなむ。大江山と打て我國の朝敵を退治せんとして五千餘騎めて御  
在らる所よ。久下弥三郎時重彼伯部良左衛門為光酒井六郎  
貞信但馬丹後の勢と引合て六千餘騎めて向ひたりと。大納言殿大軍  
を待清て戦り利あつと。西山の峯の堂よ陣を取て御在らる。其  
勢三千餘騎ちり久下弥三郎京家の人々此軍立心あつと。追落さ

んとて六千余騎を押し寄る。師基卿の執事船橋大膳大夫其勢五  
百余騎出て出合る。長沢八郎拔つて打てかまへ一丈へも味(味)と  
官軍追立てられざる。後陣は續つる。日野中将の勢崩引ふ引く。御方  
百余入討きて京都さして引退く。大納言殿も二ヶ所矢を負て大江  
山の城より引く。其後江田兵部其外丹波の朝敵ども今ハ打解て有べし  
とて正月八日の曉桂川を渡りて朝霞の紛ふ大江山へ推し上り。時と  
つとあげ一矢射遠ふ程をわき抜つれと責上り。一陣に進んだる  
久下弥三郎が舎弟五郎長重痛手を肩に討まふ。是を見て後陣  
の勢一丈も及ばず捨鞭を打て逃る。敵も追ざる。追ざる。追ざる。十  
里外りの外まで引ぬ者なかりけり。

野木頼玄獨戦大渡

敗山崎義頭救義助

明き正月九日の辰の刻は將軍八十石騎の勢を大渡の西の橋詰ふ

か寄橋桁とや渡らん川とや渡る。さうと見ゆ。橋の上も川の中の  
敵の構へ嚴し。けさ如何いと申し且思ひ。時移る。引く。時  
小官軍の陣より。雄の若武者ども百騎をり進み出て足利殿此  
搦手より憑を思召す。丹波路の御敵どもを昨日追ちりて  
一人も残らざり。討取てり。御旗の紋を見ゆ。定後の人。大略此陣へ御  
向り。と覺へ。治承。足利又太郎。元暦。佐々木。四郎高綱。宇治  
川を渡して名を後代にあげ。此川の宇治川よりも淺く。而も早か  
ど爰を渡されりと聲。欺く。箆を叩て。笑ふ。武藏相摸の兵共  
敵小招り。如何なり。早き。淵川。渡り。渡り。渡り。渡り。假令  
川深ふ。人馬とも沈み。後陣の勢を。橋小踏。渡り。か  
とて。二千餘騎一度。馬を打入んと。執事武藏守師直馳す。  
つて。是の。物小狂。馬の足も。大河底は。早や。上り

静りたるを渡さば渡さば人どろろ暫く静りて在家とこぼち筏と組  
 んで渡らんむろぞと下知せしれりむむ進むる兵實もとや思  
 ひらん聽て近辺の在家數百軒をこぼち連ひて面三四町あり筏とぞ  
 組むる武藏相摸の兵ども五百余人こも乗て橋より下を渡りたる  
 が河の中より打つる乱杭も懸て棹をさせども行やらむ敵の雨の降ど  
 散く小射る筏の少しも動くを兎角して流は淀とる浪小筏の舳を押  
 切して竿も留まらむど流はりるが組と重なる材木ども次第よとな  
 れよけむ五百余人乗る軍兵皆水よ濁して失ふる敵の楯とこ  
 たきあは見えよと笑ふ味方の身をあせり如何のせん騒ぎ悲しめ  
 共叶と又此軍散ると後橋の上たる櫓より武者一人矢間の板を推  
 開て治承は高倉の宮御合戦の時宇治橋を三間引落して橋拵り  
 残てひひをだよ筒井淨妙一來法師矢切但馬さんどへ一条二条の大

路よりも廣げよ走り渡りて合戦仕りの況んや此橋の材の料よ  
 所々板を弛ていども人の渡り得ぬ程の事ありはり坂東より  
 上て京を責むる川を隔る合戦れあむら思ひ設らして  
 了そひひつめ船も筏も夏の煩ひをうけてよも叶ひひら只橋の上を  
 渡りて手攻の軍よ我等が手ある程を御覽しと欺き耻めてはざ  
 笑ふてそ立りたる是を聞て師直内は野木と市兵衛入道頼玄と  
 て大力の早業打りの取て世よ名を知らむる兵ありたるが。胴丸の上  
 藤縄めの大遣とそも間もなく著る。獅子頭の兜は目下の頬當りて  
 四尺三寸のいつ物作りの太刀をとまき大楯揚の臆當脛衣の下へ引こ  
 柄も五尺身も五尺の備前長刀右の小股よかひこめて治承の合戦の音  
 聞て目よ見りる人る淨妙もや劣ると我を見よ敵を目よ懸る程  
 らるん天竺一の石橋蜀川の繩の橋なりとも渡り得むと云と有べ

きと高聲小廣言吐く橋桁の上よぞ進くる櫓の上か楯の陰る官軍  
 も身を見て射て落さんと差つゝ引つゝ散く小射る面僅一尺斗るある橋桁の  
 上を歩んで矢よ遠へ弓手の矢よ右の橋桁に飛移り妻手の矢よ左に丸れ  
 橋桁へ飛移る直中さうて射る矢よ矢切の但馬よあゝ糸ども切て落さ  
 め矢のさうりあり。数万騎の敵御方立合て見らる所よ又山川判官が郎等  
 二人橋桁を渡り續ひつゝ頼玄弥ちうをえて櫓の下へかづき入堀立てる  
 柱をるのやくと引ふ橋上よかひつゝ櫓をれば橋共よゆるぎ渡りてさや  
 ゆり倒れあつと見へつゝ櫓の上なる射手ども四五十人叶つとや思  
 ひらん飛下りく打倒れあつとやめいて二木戸の内へ逃入りまゝ寄手数  
 十萬騎同音よ服を敲ひてそ突ひつゝさや敵へ引ごと云程とられ  
 参河遠江美濃尾張のはや雄の兵ども千余人馬を乗放しく我も死  
 りとせきこ入て渡る小射落されせき落さるゝ水小溺る者數を知ら

せそまてしも恐まど幾程のなき橋の上よ皆の子を打つるが如く立双ん  
 で重くは構く櫓か楯を引破らんと引つゝ官軍勇く構を  
 了らん橋桁四五間中より折して落る兵千余人浮ぬ沈ぬ流を行數  
 万の官軍同音よ楯を敲ひてどつと突ふされども野木と市兵衛入道計  
 りの水練さ達者さうけまゝ橋の板一枚よ乗り長刀を掉ふさうて本  
 の陣へぞ歸りつゝ是より後橋桁もはぐさむを代も叶と後又四方五里  
 三里の間ふら取へき糧を。三日かそつらるる敗北の端をると尊氏兄  
 弟を始仁木。細川。高家の人く片唾を吞で居つゝ。かろ所よさ  
 色小賢しげさう者一人立封たる文をりて赤松筑前殿の御陣の何  
 くあてをどと向く走て出来る筑前守の八日の霄より桃井修理亮土岐  
 三河守。安保丹後守と陣を並べ橋下よ居つゝ。此使を見て急  
 き文を披て見まゝ舎弟信濃守範資の自筆あて。義貞以下の敵徒

等退治の夏將軍家の御教書到来の間為義兵播及小罷下る処  
は細川御律師定禪京都より責上りて間路次よあつて泰會を且と  
元弘の嘉例よ任して範資可打先陣より一諾事訖今日茂川の宿は  
着ひまうり明日十日辰の刻より山崎の陣へ押寄て合戦とすときふ  
て此より又將軍へ申さしめあつて書りて。範前守此状を  
持参して讀上りけり。將軍を始めとて吉良石堂高上杉島山  
の人々今斯とぞ悦合ふ事不斜此使立帰て後相圖の程も成り  
は細川御律師定禪二萬余騎よ。櫻井の宿乃東へ打出赤松信濃  
守範資二千餘騎よ。川よ副て推寄る。範前守貞則川向より旗の  
紋を見て小舟三艘よ取乗りあ渡りて。兄弟一所よる。此回東西數  
百里を隔て安否更ふ知らざりしかば何れの陣より討せぬと安き心  
もたうりつる。互小恙あつりたる天運の程とて不思議なれと手み手

を取組額を合せて悦び泣き泣き泣き山崎の合戦元弘の古例  
よ任せて赤松兄弟先ツ矢合をせしとて。兼て定めしめてり。りをも  
播磨の紀氏のめりども三百余騎技懸して一番よ押寄り。官軍て  
きと小勢と見て木戸を閉ぎ逆茂木を引退て五百余騎技つと懸  
出さる。寄手一をりりりり追立られり四方よ逃ちる。二番よ  
坂東坂西の兵ども。二千余騎櫻井の宿の北より山よ添くわ。寄り  
て城中の大將殿屋右衛門佐義助の兵并宇都宮美濃將監泰藤が紀  
清兩黨二千余騎二の木戸より。同時よ打出て東西よ拘り合南北へ  
追つて半時斗り相戦ふ。汗馬の弛遠く音聞を傳る。声山小響き  
地を動りて雌雄未だ決せぬ戦ひ半あつ時四国の大將細川御律師  
定禪六万余騎赤松信濃守二千余騎よ令と押よせり。官軍敵の  
大勢を見て叶らざりと思ひり引返りて城の内よ引籠る。寄手則機



乗て堀小飛濱り逆茂木を引のけて射ども痛まふと打ども漂まふ  
 のり越て責入る程堀の死人ふ埋もて平地ふちり。矢回ハ皆射と  
 ら多て用き得む城中もや色めき立て見へるが。一番み但馬の國に  
 住人長九郎九衛門同意の兵三百余騎旗を巻て降人よ出づ。是を見  
 て洞院按察中納言殿の御方文觀僧正の手のりのちんど云てこの間  
 畠水鍊しつる者ども弓を弛し甲を脱て我先と降人よ出る間城中の  
 官軍力を失うて防ぎ得む。さういふ淀鳥羽の辺引退て大渡の勢と一ツふ  
 ちりて戦つとて討残されらる官軍三千餘騎赤井を差く落て行義貞  
 此よと聞て山崎の陣かゝて敵皇居よ乱入ぬと覚るぞ。王上を先ツ  
 山門へ行幸成くとすつとこそ心安く合戦をもせめとて大渡りを捨て  
 都へ引返し申さるれば大友千代松丸宇都宮治部大輔公綱の降人よ  
 成て將軍の御方よ馳加とる爰よ新田越後守義頭ハ山崎破とぬと聞

て三千余騎よて馳向とぬとらる山崎の大渡りに向ひ官軍ども皆  
 大将をととて我先よと逃來るをきこは返せと遮り留て向られは  
 ども耻を思ふもの少く一命を惜む輩の多うりたる故也。義頭よ隨  
 く來る者ハ稀なりた。耳も聞入むと北のびり義頭已ハ相撲つ辻  
 と過らむと時引くへたる兵を加て漸五千余騎よとらる。此  
 勢ハ何とも義勇のりのどもく爰よて義貞義助一所よ成て其勢亦五  
 千斗り淀の大明神の前を引申さる。時細川御律師定禅六万餘騎よ  
 て追懸る義頭跡とぬ某よ任せとぬ。御参内有て君の行幸とぬ  
 したてすつとらる。後陣よ支へ引らるが相撲が辻を陣よ取と旗と  
 颯と差上たりたるども跡よ合戦有とぬ義貞よ告らぬと義貞先  
 山門へ行幸を成奉ん為ふ京をさうて急がれる義頭矢軍よて旦  
 く時を移。今ハ義貞内裏へ泰らぬと覺ゆる程よなると。三千余

騎を二手に分て東西より咄と喚びて懸入大勢を颯と乱し合火を  
 散して圍ひくる只今事で味方又在て敵より大友宇都宮が兵  
 ども越後守を見知て目余の敵も目せうけを此を取籠彼は追詰  
 打とめんと競ひかゝるを義頭打破て圍を取出てして追散し七  
 八度まで自分手を下して戦つたり小燈の袖も甲のどろろも皆切  
 落されし薄手少く肩もろく僅小都へ歸らるるが斯大勢を圍と  
 て多くの敵と討取切ゆけ命を全せしむるを度連と若武者  
 ともを義貞の子息なりと敵も味方も賞歎しむる

評曰一度主従の約束と成てより己来主の恩を以てし臣の忠を以て  
 事るる一命と捨るを以て義と禮と是と忠とを事の切なるが  
 及で一命と生んが為よ主と捨て敵に降する人とする者のせむる処  
 なり無道至極せり其上公綱元弘の戦の時相及が命も随て朝敵

の數ふ類して忠なり己小罰せしむるに武勇の譽あはせむとて論  
 言めて召上せしむる一命と助け本領安堵りる耳よ非む向後朝  
 家の武臣たるべしとて新恩餘多給てり無忠して賞よあづる事  
 傍の人も目覚敷思ひけるなる重恩を忘る降人ふたり敵も属する  
 夏人倫と可言や元を勇み品あり力量早業人ふ勝てる人心さ  
 すへの勇よあはせむと云ども力の人よあはせむ早業双たきと頼と敵と  
 勝負して毎度勝よ乘るなり又將の勇れ勝まざるも武の道とよく知り  
 生得の謀方有る可勝圍を量り戦ふ度毎に勝よのるあり世人是を  
 勇なりと思へり如是の人必定死んとする時臆く行跡有るもの  
 又有才故小事の妹頭以前小緒人是を大事とする時勇を謂る人  
 緒人大事とて不謂所よ此人勇を謂世人是を勇なりと思ふ才の  
 つく事の不出来を知る故ふ云ひ又血気少て云又ハ事出来ん少の時



ふ當てゝ免も角も可成と思ふ故ふ云如是の人生得ふ勇無故ふ定て死  
 るんば時臆とるものなり此等の勇の不足所なり公綱こそ不同なり  
 ん欵毎度戦場ゆく敵を破る事人小勝と東國よ無双勇士たる今  
 度の切なるふ臨で降人ふなる事勇のたざる所ふ在又勇の誉とある  
 者心なきを一度二度の不覚も臆したる事も有者たる義家朝臣の三  
 度の可除勇なりと不可云但し事の品ふ可依一度少ても無勇を知事  
 有と宣ひしと理りたる哉今の公綱が降参し出く不思當座の不  
 覚中もあつて一度少ても勇の不足所顯して最をかゝりしと又  
 大友千代松丸の前の入道愚鑑が為少の孫なり後少の刑大輔氏時  
 と名乗し祖父の入道が心中今よ不始君小忠を盡さんと思心な  
 く無勇無道の者少唯當時身を立んことを耳思ふ者なり此故  
 よ嫡子千代松丸十六歳も成をも召に應て京都ふ上せ次男と

ろろ左近將監と尊氏の方へ遣しけり彼入道の心中を謀むに官軍  
 勝も乗らば左近新田小降参し尊氏勝も乗らば千代松丸の武家  
 へ降参せよとこそ兼約と成つし是臣の中の賊なり速も可誅と  
 とあるべし。さき紫の如くたる者も親もむとをれと紫の赤もよ  
 もあつて黒泥もあつて倭人なり大友と敵とをせん味方とやいな  
 ん勝時の御方ゆて得少く負る時の敵となす損多し何ぞ世のあ  
 だよ非むとせんや其中小大友のあつて少し。宇都宮のあつて多し。大友  
 の敵もたつても勇なり。宇都宮へ勇るれば勇者の倭なり。は世の  
 は世の仇なり。

官軍敗績主上落都

勅使河原決死羅城門

去程よ山寄大渡りの陣破まゆと聞へり。京中の貴賤上下俄も出来  
 る夏のやうに同章をゆき倒迷ひて車馬東西よ馳遠く藏物財宝を

上下持運義貞義助未と馳参らるる前主上の山門へ落させりん  
 んとて三種の神器を玉躰よそへ鳳輦よ召きたれども駕輿一人  
 もたつらるるが四門を固めてい武士ども澄着るが。徒立よ成て御輿の  
 前後をぞ仕りたる。吉田内大臣定房公車を飛せて参せり。さうけ  
 るが御所中を走り廻り見ゆよよく近侍の人とも周章たり。さうと覺  
 へて明星日の札二間の御本尊まで皆拾置きて。内府心静よ青士ども  
 ふ執持せて参らせり。さうけ如何して見落しゆひらん。玄象牧馬達  
 摩の御袈裟毘須羯摩が作らるる。五大尊取落させり。されども此大  
 臣行幸よ後見せり。参内有るも勇を御在せり。故ちる。其外の重宝  
 とも取持せり。ひも勇たつる。さうけ取落させり。夏へ更よ不覺よ  
 ら。去へ御行幸の御粧公卿天上人三四人。そ衣冠たつ。供奉せり  
 きて。さうども其外の衛府の官へ皆甲冑を着り。弓箭を帶りて翠花

の前後よ打囲む。此二三年の間天下僅よ一統して朝思ふ誇りし。月卿  
 雲客指する事もかきよ。武具を嗜と弓馬を好とて朝義道よ遠ひ禮  
 法則よ昔さうも早から。不思議出来る。さう前表らると今よ思ひた  
 きたり。新田左兵衛督。服屋右衛門佐。并よ江田大館。堀口。里見。大井。田  
 中。龍沢以下の一族二十余人。千葉。久宇。都宮。美濃。將監。仁利。高梨。菊  
 地以下の外様の大名八十余人。其勢僅よ二万余騎。鳳輦の跡を守護  
 して。皆東坂本へと馬を早む。事の騒り。し有様。只安録山。が潼關  
 の戦ひ。官軍忽ちよ打負て。玄宗皇帝蜀の國へ落させり。ひよ六軍  
 翠花よ隨て。劍客の雲よ迷り。異らる。爰に信濃國の住人よ勅  
 使河原丹丸衛門へ大渡りの手よ向ひ。さう山崎既よ破きて。王上  
 をも何地ともなかり。東をさうて。落させり。ひねと。聞へる。見危致命臣  
 の義ら。我何の顔有て。亡朝の臣とて。不義の逆臣。ふ隨らんや。といふ

て三條堀川より父子三騎引返して鳥羽の造り路羅城門の辺まで  
 腹かき切て死にたり。嗚呼此勅使河原丹丸衛門元弘の戦も武  
 勇の譽を取て忠ありし者なり。さるる近年君の御政道の邪るを見  
 て眉をひそめて人ふ申けり。政道の正しきとて天下の士頼朝卿より  
 以来の修りふ習ひを善と思ふ。益て邪の御行跡多々世の亂ちり  
 たり。今在と申す。大塔宮と始奉り朝家の臣達修りを極めゆ。是より  
 天下の士は目覚し思ふ所は忠ありし人より賞を行ひ。准後の御口入  
 と以て無忠者邪は賞を食ふ。是亦士の目覚し思ふ所あるの事。非  
 非ど忠者の士恨を食む者あり。尊氏直義是を見て天下と棄んが為ふ  
 大塔宮と奉弒。今見の人世は武家の有と成らん。又義貞圓心野心を  
 さし。さるる何とて朝家の安穩は御在せん。事有ぐ。其の君の御  
 思ふに朝の為は死を致し。なんと思ふ。死の期遠き。非むと思へ。夢の

内をりしと申す。依之准後も御ゆく。深く緒御も是と最悪げ  
 被思々。例の者とぞ名づけらる。物の意とも不弁なる。神  
 達部北面の侍ども。朝家より事の出来なん。少の一番は死にき。男ぞ  
 あら。いり也。さるるどわが笑ひ。て。所をも。義と不知して笑ひ  
 たり。者ども。或は降参り。又の一番は。逝々も。勅使河原の手勢六十  
 余人。義顕の手は。属して。一戦。命を軽。宇都宮は。對して。火を散  
 て。戦ひたり。數人の敵を。打と。我身も。二ヶ所の疵を。蒙。又大渡り。よ  
 ても。數度の戦。は。高名。と。たり。手の者。十一人。ぞ。相残る。義顕。自ら。戦。て  
 數ヶ所。手を。負。被。引。たり。勅使河原。猶。後陣。は。支。敵の。追。捨て  
 引。を見て。今。敵。と。引。三條堀川。を。君。何。と。も。なく。落。させ  
 り。ひ。ゆ。と。人。申。召。連。たる。悴。丹三郎。は。向。て。申。ける。我。痛。手。と。い  
 り。遠。く。行。幸。の。供奉。難。く。常。く。申。せ。は。是。なり。と。父子三騎郎

從八騎引返し自害して失ふるなり。其身を痛手を負て爰小死を  
ろとも其子丹三郎を都へ返して主上の御先途を見届ざりや村上  
彦四郎義光の其子義隆を残して大塔の宮に御供よ加へると大  
小劣りて残念なるな

正成防禦摧肺肝

長年抜敵懸向内裏

名相伯耆守長年の勢田を堅めて居りつゝ山崎の陣破して主  
上とや東坂本へ落させしむねと聞えけまは是より直に坂本へ馳参  
らん事の安々まども今一度内裏へ馳参らで直に落行ん事の難  
有べしとて其勢三百余騎めて十日の暮程は又京都へぞ帰りける。  
今日の悪日とて將軍未だ都へ入ぬるまどむ四國西國の兵數  
万騎打入る京白河は充滿したまふ帆掛舟の笠符を見てこゝに要り  
彼を遮て討留んとしつゝまども長年け散しては通り打破つては聞

と出で十七度逆掛合つるは三百余騎の勢次第くふ被打て百騎討  
つふ成よる。されども退く心半点もなき内裏の置石の辺りまで馬  
り下り堀を脱て南庭ふ跪く主上東坂本へ行幸成て數刻の事か  
四門悉く閉て宮殿正は寂寞たり然まども早甲し人とも乱入見へ  
て百官禮儀を調へ紫宸殿の上少の賢聖の障子引破らとて雲其の  
画圖此彼は散乱まどり佳人新粧を飾り弘徽殿の前は翡翠の御  
簾半より絶て。微月の銀釣空々懸まり長年ほろぐと是を見てさ  
しも勇めり夷心ゆ哀の色や増りらん泪を兩眼よ餘して燈の袖を  
ぞめしむる。良且く徘徊て居りける敵の時の声間近く聞へる。  
陽明門の前より馬を打棄て小白川を東へ今路越は懸て東坂本へ  
ぞ参りたる。其後四國西國の兵ども洛中へ亂入て行幸供奉の入り  
家屋形とて火を懸たまふ時節辻風烈々吹布て龍樓竹苑准

后の御所式部親王常盤井殿王上御遊の馬場の御所煙一時は立発つ  
 て空四方は充滿猛火盛んして前殿后宮緒司八省三十六殿十二  
 門大厦の構は焼く一時の灰燼と成より越王号を亡して姑蘇城一  
 片の烟りとらる。項羽秦を傾て咸陽宮三月火の消まりは越秦楚の  
 古へも是少過と洩まより有様。又此は捕正成は宇治へ敵やよ  
 ろかと相待々々忍の兵来て尊氏を大渡りよ向へり。宇治の清手の軍  
 勢三万計り仁木義長細川清氏今川五郎入道彼是十六人土岐佐永  
 もひひと申々。大渡りの軍の躰とも敵小忍を入置義貞の陣へ軍  
 使を遣へも事櫛の齒を引ぐ如く敵の陣取の様能聞たりてけしむ十  
 日の亥子の刻少夜討して十死一生の軍をもへ。尊氏の陣へは宇治の  
 仁木の陣へも忍の兵を入る事五百余人なり。山崎へも大渡りも使を遣  
 へ今日を暮しの人夜小入るへ先此陣より夜討を懸べし。相圖を定

めり又細川の定禅西国の軍勢二万餘騎よて山崎へ寄るのより。摂津の  
 忍の者申来りり。又義貞の陣へ使を馳て大渡の御陣は九までには  
 大勢へ入はじ。宇都宮菊池宗徒の人々も山崎へ被遣り此方へ  
 も兵をつり度久ども。今夜の軍は兵をさす悪く存候  
 早く其手とり山崎へ加勢を被遣り十日の寅のころ申遣りけ  
 り。義貞仰承りひひぬ。夏の次第義は當つて覚へ。又軍の刻限相圖の  
 夏一著維ぞと問へ。スハと答へよ。事最服信を所をり。次は山崎  
 の軍心元かくりのより仰ひ當方程進く。山崎の軍左すでの夏は  
 まり。義貞自ら向ひる心安く思召し。返答せし。此使如比  
 下刻ふ。帰りり。正成足摺して山崎の陣へ破とる。其構無下。小  
 浅間あり。尤其中小京家の者多く有必定軍へ敵つ。然るん時ふ  
 至く。義貞比兵向ひる。尊氏大勢よて川を越する。然るん。然るん。然るん。



なるべしとて再び軍使をよめて別の馬をよめて馳行しむ此時己より外  
 下刻過ち義貞の對面して楠が存じざる昔を申さる外刻より敵の  
 知らざる様は軍勢を指遣はさる侍るや若まよ夜明て勢の通路敵の  
 知様ふひり京より急ぎ勢を山崎へ御下知わは義貞の御勢可然結城  
 親光等ひひらんとり義貞の云今より此陣を分て遣はさん敵知  
 らんじらざるをて又軍使を歸されたる楠が使者歸りも着さるよ楠ま  
 使者を以て勢を分りふやと申遣はせたるよ早辰の中刻ふちりて山崎の  
 軍始りぬ楠辰の下刻過ち遅兵十二人を勝て宇治より山崎へ池より鳥  
 羽の秋山まで来りたるよ早山崎の陣へ敗てり正成九を思ひつ事  
 よ存の外ありと外申の刻迄の候と思ひしよ是は公家の人々なは  
 いは城を出て戦ひかく無下なる負さるる是より直に内裏へ馳参り  
 主上を山門へ供奉まぐ侍まども手のめども宇治よりを召連てと

そとて秋山より軍使二人を宇治へ歸し山崎の陣破まね某只今夫へ  
 歸るべきなり惣軍騒ぐべしと申遣はせ楠宇治より歸まら未の刻ふ  
 たりぬ則五千余騎の兵の内二千を八幡の城へ籠らせ内一千を飯守  
 の城へ籠らせ如何もして川尻を指塞けと下知せり五百余騎へ最  
 初より勢田ふあり残りて二千五百騎を三手ふ分先陣へ平岡生地丹  
 下等八百余騎中陣へ正成近衆の兵六百余騎後陣齊藤新庄の者  
 ども百余騎めて打てり十餘町後して平野新藤内藤五百余騎  
 みて打つ正成黨の者三千余人を召具して前後の陣を見廻り木幡の  
 峠を打越たるよ甲乙人在り所より打入て斯を防を楠令を傳へ彼も  
 のども防んとせが打散せ北るを追なるよ下知して静くと打通ら  
 る程ふ五十騎百騎づ引分るあふまわくる者ども菊水の旗を  
 見く大に恐む皆山林に逃隠して前を遮るりの更ふたり然まども

正成前後は敵有と見ては、山嶺をなかり一勢を備へて通りぬる。爰は迤て谷川を前よあて、河原は旗打立とる大勢あり。正成是を見らば、勢のちど三千かろ、有と覚え、楠兵を下知して川の此方北端より上の嶺の腰を小楯取、生地丹下、八百餘騎の内より弓の兵を勝て三百余人を山の半途よあらし。敵を見下して、差攻引、攻射たしけ、谷川の挟き中よ所せき、打困ん、兵ら、空矢の更みかろ、ける。敵は、成て騒ぐ所を先陣七百餘騎備を乱し、川を渡して懸りけ、二陣よ正成備を不亂静くと懸り、後陣も同く十余町引下りて、先陣よ目をも懸む、雑人雑馬を助け、静ふぞ打しける。因之敵の一支もなかり散り、成て山林は逃入り、楠討取し、首少く切けさせ、通らるる。先よ乱と敵を追へ、先陣の大將、今あはる。足輕の兵、二陣の正成打過て、後陣の兵通りぬる時、山の半途よ備へ

し、弓の兵、則後陣よ加りて、静くと了て、打し、兵の働最輕し。夫より前よ遮る敵も、なかり、醍醐山科辺を通りぬる時、桃井直常、仁木義長跡よ、官軍を追慕ふて、氣色をうて、歸り、逢し、楠使者と通して、正成皇居へ参り、爰よ、戦ひ、人の討ま互に益あり、されば、無事に通りて、後重とて、見参よ入ら、申遣り、直常義長、楠殿の旗と見て、故我等も、たあひひり。御方の勝軍し、と云とも、兵皆疲、楠殿の御勢も、さぞ、此軍は天下の大事、私の変よあ、直常義長、楠殿の芳志を受、今よ、始めの事、如何よ、情を、軍と、無事、罷かへる、あ、と、兩人の兵を引つ、川原を通りて、京へ行、楠が兵、道を打て、東坂本へ参りたり。此と、若戦、楠が手立、ふかりて、京勢、討る、楠無益の軍と、情深く、見え、長年と

一手よあり矢尾志貴の五百余騎王君心えたりとて敵の方へ引く  
たりが三町をくりみして正成を行逢う。かくて捕其勢を合して坂本  
よ着けまが亥の刻はくろよありなり

親光狙尊氏忠死洛陽

主上坂本大宮龍願文

官軍の諸將追く坂本よ集りし正成即南岸の圓宗院よ置る米  
穀六千八百餘石大豆七千石是へ去年の極月よ江及び奔向して足利の  
一門并朝敵共の所領を闕所とて勅許をなかりたりども奪ひとて  
舟よて運びし所なり又大津よ三千餘石有る三井寺法師の意難知  
として夜數十艘舟と祐覺よ仰て夜中よ運びたり又近郷の下司庄  
官公門等楠殿とてなて珍物と得たりを不得思寄ある兵糧の  
為を米と給りし事なりと謂しよ依て皆持運んで米を送りたり  
家の子郎従ともはばあさて云く楠殿心の愛りありや日頃は無難

たる人の何の用ともなる米を求めぬ事いふ而も遠国よてかく  
のふ夏河内へを何とて取運びぬらんと私語あり然る所小黄金百兩  
を出して米を買ひまぐるふ其米千二百石余なり又緒人の送りたる米  
千六百余石山門へ上りたり又據三万石あり置たり大津より運  
びし三千餘石を翌日近江の御領米なりとて職事是を以て渡し奉  
る米六千八百石余大豆七千石を楠預りたり君も臣も実も賢いと  
き正成が智謀故と被讚る義貞と始緒國の士の糧乏しきども楠  
三千石小おらんで糧を持大豆二千余石を持はる家の子郎従皆飢  
たる色たりたり如斯夏上古よ其類を不聞益く末代よ有がき良  
將は是へ扱なき明ま正月十一日足利尊氏卿八十万騎の大軍を師て  
都へ入るる善て合戦事故魚して入洛せし持明院殿の御方の院  
宮の御中一人御位よ即とてまつく天下の政道を武家より計ひ申

結城親光

尊氏を

討んとす

揚梅東洞院

戦死の圖



了と評定せしむる。持明院の法皇儲王儲君御一人も残らせぬ  
 ぞ皆山口へ御幸なす。同將軍自ら万機の政をいらん。夏  
 も叶ふまじ。天下の事如何をききと案煩らひ申され。結城太田  
 判官親光へ此君ふ二心なきものなると深く憑まじ。のせて朝思よ  
 袴る夏傍ふ人をきか如くありけ。鳳輦よ供奉せんとし。此世の  
 中逆も今のけ。かろむと思ひ。如何あもして將軍をねむ。た  
 てまろん為。熊と都。落止て居。或禪僧を縁。執て降参仕  
 る。由を將軍へ申入。親光が所存よ。誠の降参。あ。と  
 只尊氏をた。ん為。去夏の様を。んと。大友左  
 近將監とを遣。去程。大友と太田判官と揚梅東洞院。小  
 て行合。大友の元来。少。思慮。者。結城。向て御降参  
 の由と被申。に依て。某と御使。て事の。と尋。と仰。て。

何様降人の法を。御物の具と。せめ。い。か。言と。か  
 け。親光是を。聞。尊氏我。心中。と推量。有。討手。の使。大友  
 と出。と。心得。物の具と。解。と。御使。参。ら。せ。ら。ん  
 と云。三尺八寸の太刀を。抜。大友。飛。甲。の。本。領  
 ぞ。鋒。五。寸。斗。り。ぞ。打。大友。心得。と。太刀を。抜。と。け。ら。か  
 目。や。と。枝。け。て。馬。より。倒。死。ふ。是。と。見。て。大友。が。郎。從。三  
 百。餘。騎。結。城。が。手。の。者。十七。騎。と。中。取。て。餘。は。是。を。討。んと。結  
 城。が。郎。等。元。来。主人。と。共。討。死。せ。ん。と。思。切。る。者。ど。も。中。に。恐  
 る。氣。色。も。主。從。十八。騎。降。を。捕。へ。三百。餘。騎。の中。へ。切。て。入。敵。數十。人  
 討。取。て。其。場。不。去。鬪。死。を。敵。も。味。方。も。是。を。聞。て。あ。勇士。と。時。の。間  
 失。ひ。つ。る。事。と。惜。ぬ。人。を。な。り。る。楠。正。成。あ。と。聞。て。親。光  
 忠。あり。尊。氏。と。死。を。共。せ。ん。と。思。ふ。夏。豈。忠。よ。非。や。ん。や。慮。り。短。き。故

大友と指ちぐるるを以て。又損得と量るるも大友の豊後筑後兩國  
 の守護あり。結城の國の守護ふあり。御方より得敵へ損なり。但し勇  
 と智謀の可似もなき。結城の勝もたれ。彼是量見る。御方の損敵の  
 得ありと申され。且緒臣信服し義と勇と忠とを兼ぐる。良將の名  
 言ありと感ふる。嗚呼結城親光の尊氏を討て討ん為よ。あまの降  
 参せんと清く勇なり忠あり。然れども親光が所存を敵よあまの  
 其事と遂ぐる。天命なり。郎従どのの王と共に討死せんと思ひ切るるも  
 忠あり。王上已に東坂本に臨幸成て大宮の彼岸所ふ御座り。且も参  
 ぐる大衆一人もなき。初め衆徒の心愛れ。やと敵慮と悩まらるる処よ。  
 藤本坊英憲僧都参りて申出る言も。魚く涙を流して大床の上よ畏  
 て。ひひる。王上御簾の中より。敵覽ゆ。名宗と委し。ごご  
 仰せらる。扱其後視やありと仰らる。ねへ英憲急ぎ視を召よせて御前

小差置自ら宸筆と染ら。且御願書を遊ぎ。是を大宮の神殿に籠りよ  
 と仰らる。且英憲畏く。右方推禰宜行親と以て。是を納め奉る。暫く有と  
 圓宗院の法印定宗同宿五百餘人を召具して。参り。君大に。敵感。し。り。て  
 大床へ召らる。定宗御前。跪く。申さる。桓武皇帝の御宇。高祖大師當山を  
 開基して。百王鎮護の御蓋を。立ち。ひ。ひ。以来。朝家。悦。び。有。時。九。院。わ  
 けて。掌。と。合。せ。山。門。は。愁。有。日。百。司。均。し。心。を。傾。け。れ。ど。と。申。交。ひ。ら。む。滅。ぶ  
 佛法と玉位と相比とる。故人とて知る。ばと云。との。ひ。ひ。と。さ。ま。今。逆。臣。朝  
 廷を危めんと。と。る。依。て。忝。ら。る。も。万。乘。の。聖。王。我。山。を。御。憑。有。て。臨。幸。成。て。ひ  
 ん。ご。り。と。編。し。申。衆。徒。の。人。も。あ。る。ま。と。あ。て。身。不。肖。よ。ひ。と。も。定。宗。一。人。忠  
 貞と存。ざる。程。な。く。三。千。比。衆。徒。二。心。の。あ。も。思。召。ひ。し。と。て。廿。一。所。の。彼。岸  
 所。其。外。坂。本。戸。津。比。叡。辻。の。坊。家。小。札。を。打。て。諸。軍。勢。と。ぞ。宿。り。る。そ。の  
 後。又。南。岸。坊。の。僧。都。道。場。坊。の。祐。覚。同。宿。千。余。人。召。具。し。て。先。内。裏。に。参。り。や

がて十禪師じゅうぜんしは立登たてのぼて大衆たいしゆと起おこし會儀かいぎの赴まゐり院いんと谷やと觸ふ送りおくりたる間ま。  
 三千さんぜんの衆徒しゆと悉ことごとく甲冑かぢうと帶おびと馳は參ま先官軍せんくわんぐんの兵糧へいりやうとてと殘のこ貨げ三千貫さんぜんくわん。  
 米穀まいこく三千余石さんぜんよしやく波止土濃なみのの前まへ積つりたると祐覺ゆうかく是こゝと奉まか行まりと諸官軍しよくわんぐん。  
 又また配分はいぶんと残りのこりと六十八百石むそはちひやくしやく大豆とうぢう七千石しちせんしやくとも今いま又また配分はいぶんとと云々いんいんと共とも。  
 楠判なはん下したて配分はいぶんせと其外そのほか稗ひ千石せんしやく黍等との類るいひ三千餘石さんぜんよしやく有ありと是皆正こゝれはただ。  
 成なりりと去年こゝれいんの極月ごくげつ江忍えにんへと發動はつどうの時とき畜置ちよくちたる物ものをりと諸軍しよぐん小糠せうかうとてと。  
 尋たづ求もとめりと小楠せうな又また糠かう俵ひら百二百ひやくにひやく或あるは八十二はちじふに其分ぶんとと皆送みなおくりと敗ま。  
 軍ぐんの士し是等こゝれらの事ことをて力ちからを得え諸大将しよだいしやうと始はめ諸軍勢しよぐんせいに至いたる逆色さかいろと直ただ。  
 未いまと醫王山王いおうさんおうと我君われきみと捨すとせりと悦よろこびとけりと君も楠なが精忠せいしゆ。  
 今いま始はりと支したると今度こんどの謀まうの言ことばも難演なんげんと敵感てきかんよりと怖おそると。

南北太平記圖會三編卷十四下終



